

| | |
|------------------|---|
| Title | 子どものテレビ視聴への親の介入行動に関する研究 |
| Sub Title | Research on parental mediation of children's television viewing |
| Author | 志岐, 裕子(Shiki, Yuko) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2006 |
| Jtitle | 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.62 (2006.) ,p.77- 87 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | <p>For three decades, research on parental mediation of children's television viewing has drawn considerable attention here search has mainly focused on the classifications of the mediation strategies and on the determinants of these strategies.</p> <p>Parents use three major strategies in affecting children's television viewing: restrictive mediation, instructive mediation, and covieing. The research, however, seems contradictory, for instance, as to the corresponding frequency of each mediation, because the definitions of the above mentioned strategies still vary among researchers. To resolve this problem, this paper proposes that a new reasonable definition of covieing is necessary. In particular, it should involve: (1) interactions and social relationships between children and the coviewer, (2) the presence or absence of parental intention to mediate children's television viewing, and (3) adistinction between covieing and the provision of comments about television content.</p> |
| Notes | 論文 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000062-0077 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

子どものテレビ視聴への親の介入行動に関する研究

Research on Parental Mediation of Children's Television Viewing

志 岐 裕 子*
Yuko Shiki

For three decades, research on parental mediation of children's television viewing has drawn considerable attention. The research has mainly focused on the classifications of the mediation strategies and on the determinants of these strategies.

Parents use three major strategies in affecting children's television viewing: restrictive mediation, instructive mediation, and covieing. The research, however, seems contradictory, for instance, as to the corresponding frequency of each mediation, because the definitions of the above mentioned strategies still vary among researchers. To resolve this problem, this paper proposes that a new reasonable definition of covieing is necessary. In particular, it should involve: (1) interactions and social relationships between children and the coviewer, (2) the presence or absence of parental intention to mediate children's television viewing, and (3) a distinction between covieing and the provision of comments about television content.

1. はじめに

子どものテレビ視聴への親の介入行動に関する研究は、この30年間、増加する傾向にあるが、社会に還元できるほどの成果は得られていない。その理由としては、主に2つの問題が考えられる。1つは、研究数は増加しているとはいえ、テーマの大きさを考えれば、確たる結論を得るに足るほどの十分な数の研究がないことである。もう1つは、同じ問題を取り上げながら、研究者間で、主要概念の定義についてコンセンサスが得られていないことである。

そこで本稿では、子どものテレビ視聴への親の介入行動に関する研究結果のうち、結果に不一致がみられる研究を中心に概観する。その際、概念定義の不一致に着目すれば、結果の不一致の多くが説明可能ではないかという立場に立ち、これらの研究の見直しを行う。特に、明確な行動的介入とは言えない「共視聴 (covieing)」概念の不一致を検討することは、とりわけ問題の整理に有効であると考えて、この点を詳しく検討する。

この文献レビューにあたっては、「介入戦略」、および、「介入頻度」とその要因に注目する。「介入戦

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程 (社会心理学)

略」とは、子どものテレビ視聴に親が関与する際、具体的にどのような行動がとられているのか、その関与する方法を指す。この「介入戦略」を網羅的に明らかにした上で、これを分類しなければ、介入の実態を明らかにすることができない。また「介入頻度」とそれを規定する要因は、なぜ親が介入するのかという動機づけを検討していく上で、重要な変数である。なぜなら、介入が多ければ多いほど、親はある理由があって介入を行っているという推論できるからであり、その頻度を規定する要因は、親が介入を行う理由を説明する手がかりになると考えられる。

したがって、本稿では、文献レビューにあたって以下の2つの研究課題を立てる。

(研究課題1) 子どものテレビ視聴への親の介入には、どのような戦略があり、それらがどのように類型化されているのかを明らかにする。

(研究課題2) 介入頻度に影響を与える要因を、子ども側の要因、親側の要因に焦点を当てて、明らかにする。

2. 介入戦略の類型

これまで、数々の介入戦略の類型化の試みがなされてきたが、なかでも90年代後半までの介入研究において取り上げられることが多かったのは、Bybee, Robinson, & Turow (1982)による類型である。

彼らは、3歳から18歳までの子どもを持つ親を対象に介入に関する質問紙調査を実施し、介入には、①制限的介入 (restrictive guidance; 視聴時間量・視聴番組の制限)、②評価的介入 (evaluative guidance; 描写されたメッセージの背景的な意味を評価することを目的とした子どもとの話し合い)、③非焦点化された介入 (unfocused guidance; 番組に関する一般的な話し合いや視聴経験の共有など)、の3つがあることを指摘した¹⁾。

しかし、Valkenburg, Krcmar, Peeters, & Marseille (1999)は、このうちの「非焦点化された介入」について、(イ)それを構成する項目間に概念的関連性がないことから、その合成尺度が表面的妥当性 (face validity) に欠けていること、また、(ロ)信頼性係数が低く内的整合性に欠けていること、を批判した。そのうえで、123名の親たちを対象に電話による調査を実施し、親たちが行う介入行動に関する30項目について、その頻度を測定した。そして、主成分分析によって抽出した3つの因子を、①制限的介入 (restrictive mediation)、②指示的介入 (instructive mediation)、③社会的共視聴 (social coviewing) と命名し、介入戦略として類型化したのである。

この類型は多くの研究者の支持を受け、その後の介入研究の基礎となってきた。ただし、「社会的共視聴」の次元は、その後の研究では一般的に、単に「共視聴」とされる場合が多い。この点については後に詳述するが、本稿では当面、(1) 制限的介入、(2) 指示的介入、(3) 共視聴の3つの類型に基づき、以下の検討を進めていくことにする。

2-1. 制限的介入

制限的介入は、その戦略の性質上、Austin (1992)のように「ルール作り (rule making)」とも呼ばれることがある。主な戦略として、(イ)子どものテレビ視聴時間量・視聴時間帯を制限する方法や、(ロ)特定の番組の視聴を禁止する方法が含まれる。こうした方法をとることにより、親は子どもたちの注意を親が適切であると考える番組に向けさせ、そうでない番組からは遠ざけるのである。

もちろん、制限的介入の戦略は、これらのほかにも考えられる。Buerlel-Rothfuss & Buerkel (2001)によれば、親が子どもにテレビ番組を視聴させたくないと思った場合、外出や食事などテレビ視聴とは別の活動を戦略的に予定することによって、子どもをテレビの前から連れ出すことができる。彼らは「どの程度までこのような活動を予定するかは、子どもたちをテレビの前から遠ざけたいという親の願望の度合いによって規定される」としているが、この主張の当否は今後の研究を待つところである。

2-2. 指示的介入

指示的介入は「評価的介入 (evaluative mediation)」,あるいは「積極的介入 (active mediation)」とも呼ばれることがある。指示的介入の主な戦略は、テレビ上の出来事や内容についての説明、評価、指摘などに関わるコメントを提示する方法である。例えば、テレビの中の世界と現実世界との区別について説明したり、番組内の登場人物の行動が善であるのか、悪であるのかを話すことは、指示的介入に含まれる。また、Desmond, Singer, Singer, Calam, & Colimore (1985)や Austin (1993)のように、指示的介入を「介入 (mediation)」として定義している者もいる²。

また、研究者によっては、その研究目的に沿うように、指示的介入をさらに細分化することがある。その一例として、Nathanson (2004)の介入のメタ分類 (metacategory) が挙げられる。彼女は、暴力番組視聴時に異なる性質のコメントを与えたとき、それらのコメントが子どもたちの番組評価や登場人物の評価、暴力の正当性の知覚などにどのような影響を及ぼすかを比較検討した。その際、①子どもたちに「テレビの中の出来事は現実ではなく、台本に書かれたものを役者が演じ、カメラの特殊効果などを用いて制作されたものである」といったことを教える戦略を『事実に介入 (factual mediation)』と定義し、他方、②コメントの中で、暴力や暴力的な登場人物が望ましくないことを強調し、子どもたちのなかに視聴した物事に対する否定的評価を作り出そうと試みる戦略を『評価的介入 (evaluative mediation)』と定義した。両者はどちらも「指示的介入」に含まれるが、前者は説明的な要素を持ち、後者は評価的な要素を持つ点で区別される。Nathansonが123名の子どもたちを対象に、これらの介入戦略を用いた実験を行った結果、特に幼少の子どもたちの場合、評価的介入は子どもたちにポジティブな効果をもたらすが、事実に介入はそのような効果をもたらさないことが確認された。したがって、同じ指示的介入であっても、それぞれの戦略の特性によって、その効果は異なる場合があるといえる。この他にも Hicks (1968)のように、テレビ視聴時に与えるコメントが番組内容に対してポジティブなものであるのか、ネガティブなものであるのかによって区別している研究もあるが、これらはすべて指示的介入の下位概念と見做される。

2-3. 共視聴

共視聴は、子どもが他者と一緒にテレビを視聴する行動を指すが、その定義は必ずしも研究者間で一致していない (表1)。

多くの研究者たちが共視聴を介入戦略の1つとして見做す一方で、Colder-Bolz (1980)は、単なる共視聴は介入戦略としては見做せないと論じている。なぜなら彼は、「共視聴者としての大人が単にそこにいるだけでは (介入として) 不十分であり、番組に向けられた大人と子どもの相互作用こそが決定的な要素である」と考えたからである。この見解は、Desmondら (1985)や Austin (1993)からも支持されている。

表 1 諸研究における「共視聴」概念

| 研究 | 概念 |
|-----------------------------------|---|
| Bybee et al. (1982) | 視聴行動の共有を指す。ただし、共視聴のみの測定は行わず、番組に関する一般的な話し合いと組み合わせて、「非焦点化された介入」として測定。介入の意図の有無に関しては言及していない。 |
| Dorr et al. (1989) | 「共視聴」自体は、視聴行動の共有を指すものとしているが、子どもの視聴行動の監視や、コメントの提供を可能にする前提条件としての側面を強調している。しかし、介入の意図の有無に関しては明確に言及していない。 |
| Nathanson (1999) | 「単に、子どもとともに視聴すること」と定義。介入の意図の有無に関しては言及していない。 |
| Valkenburg et al. (1999) | 「親子で共通している番組への興味や、娯楽を楽しみたい、という気持ちに動機付けられた視聴行動の共有」を「社会的共視聴」として定義。コメントの提供とは明確に区別している。介入の意図はないものとしている。 |
| Buerkel-Rothfuss & Buerkel (2001) | 「子どもとともに座り、子どもが視聴するものと同一の番組を視聴すること」を「社会的共視聴」として定義。さらに、視聴内容についてコメントを提供するものを「積極的共視聴(active coviewing)」、発言を行わないものを「消極的共視聴(passive coviewing)」とし、二者を区別している。 |

この争点の当否を判断するにおいて、Watkins, Calvert, Huston-Stein, & Wright (1980) の研究は重要である。彼らは、大人によるコメントそれ自体の効果と、視聴に立ち会うことによる効果を比較検討した。彼らはまず、保育園児、幼稚園児、3年生、4年生の子どもたち(160名)に、次の異なる条件下で向社会的なアニメ映像を提示した。すなわち、①統制群(no pause)、②ポーズのみの群(pause only; 映像の途中で30秒間のポーズを3回挿入した映像を視聴させる)、③音声表示群(audio label; ポーズの際に、内容を説明する実験者の声のみを追加録音した映像を視聴させる)、④大人表示群(adult label; 実験者が一緒に視聴し、音声表示群と同一の説明を子どもたちに直接話す)である。視聴後、映像について60項目からなる質問を行った。その結果、内容の想起については、大人表示群においてのみ、より多くの情報を想起させる効果が認められた。しかし、音声表示群には同様の効果が認められなかったことから、コメントを提供するだけでは不十分であり、子どもが視聴するその場に大人が立ち会うことが効果をもたらしたことが確認されたのである。したがって、単に大人が立ち会うだけという意味の共視聴も、介入戦略として位置づけることが可能と思われる。

3. 介入頻度に関する要因

子どものテレビ視聴に対する親たちの介入頻度の違いは、いかなる要因によって説明されるのだろうか。介入に関する研究者たちは、さまざまな要因を用いてこの問題に取り組んできたが、本稿では、そのうち子ども側の要因と親側の要因に焦点を当てることにする。なお、介入頻度に関する主な要因と代表的な研究例を表2に整理した。

3-1. 子ども側の要因

これまで親の介入頻度に影響を及ぼす子ども側の要因として、最も多く取り上げられてきたのは年齢(age)である。先行研究からは、「全般的に幼少の子どもたちを持つ親のほうが、さまざまな介入を頻繁

に行う」ことが明らかにされている (Bybee et al., 1982; Lin & Atkin, 1989; Mohr, 1979; van der Voort, Nikken, & van Lil, 1992)。それは、介入戦略を用いる最大の目的が、子どもたちに批判的なテレビ視聴態度を習得させることであり、認知的・言語的スキルが未成熟な幼少の子どもたちは、彼らのテレビ内容の理解、解釈、評価において、大人による補助が最も必要であると考えられたからである。

Warren (2003) は、親たちは、「幼少期の段階の子どもたちは、最も知的および情緒的側面においてテレビから影響を受けやすい」と感じており、親たちの介入は、「子どもたちがテレビ内容を処理している」と親が知覚する程度に部分的に依存すると論じている。すなわち、子どもたちの発達に対する親の理解が、介入頻度に影響を及ぼすのである。

したがって、幼児期の後期には、視聴の制限も指示的介入も頻度が減少するといえる (e.g., Atkin, Greenberg, & Baldwin, 1991; Bybee et al., 1982; St. Peters, Fitch, Huston, Wright, & Eakins, 1991; van der Voort et al., 1992)。日本でも、放送倫理・番組向上機構 (2004) による調査において、子どもの年齢が上昇するにつれ、制限的介入が減少する傾向が示されている。すなわち、子どもがある年齢に達し、親が子どもの発達を知覚したとき、介入は減少し始めると考えられる。

子どものジェンダー要因も、介入頻度に影響を与えうる要因として挙げられている。Buerkel-Rothfuss & Buerkel (2001) によると、先行研究では男児と女児で視聴習慣が異なることが論じられているが (Brown, Childers, Bauman, & Koch, 1990; Lyle & Hoffman, 1972; McLeod & Brown, 1976)、介入頻度には子どものジェンダーによる有意差がほとんどみられないという結果で一致している (Abelman, 1985; Bybee et al., 1982; Desmond, Singer, & Singer, 1987; Singer, Singer, & Rapaczynski, 1984)。しかし、Lin & Atkin (1989) が 11 歳から 17 歳の子どもたちを対象に行った調査では、テレビ視聴に関しては介入頻度にジェンダー差は見られなかったものの、ビデオの利用に関して、女児よりも男児のほうがより多くのルールが設定される傾向にあることが示された。一方、Warren (2003) の研究では、男児よりも女児のほうがより頻繁に介入を受けることが確認され、Lin & Atkin の調査とは逆の結果になっている。

3-2. 親側の要因

3-2-1. デモグラフィック要因

介入頻度に影響を及ぼす親側の要因として、まずジェンダーが挙げられる。全般的に父親よりも母親が頻繁に介入を行うことが明らかにされている (e.g., Mohr, 1979; Valkenburg et al., 1999)。Bybee ら (1982) や van der Voort ら (1992) は、母親のほうがより多く子どもの世話をしているため、父親と母親の介入頻度は異なる、としている。つまり、家族はテレビ視聴への介入を、子どもの世話をするという母親の役割の延長線上にあるものとして捉えているのである。

加えて、親の教育水準が介入頻度に及ぼす影響についても検討されている。これらの研究では、高い水準の教育を受けた親は、低い水準の教育を受けた親たちよりも、制限的介入や指示的介入を多く行う傾向があることが指摘された (Fry & McCain, 1980; van der Voort et al., 1992; Valkenburg et al., 1999)。ただし、Austin, Knaus, & Meneguelli (1997) は、親の教育水準は共視聴を予測する要因にはなるが、指示的介入 (彼女らはこれを mediation と呼んでいる) を予測する要因にはならないと主張した。彼女らの研究では、共視聴を行う頻度に関しては親の教育水準による有意差が見られ、教育水準の低い親のほうが子どもたちと一緒にテレビを視聴する時間が多いということが確認された。しかし、テレビ

内容についての話し合いを行う頻度には、親の教育水準による差異がみられなかったのである。

以上の研究知見をまとめると、親の教育水準は確かに介入頻度と関連がみられるが、そのことがそのまま何らかのコメントを提供するといったような積極的なレベルの行動として反映されるわけではないといえるだろう。しかし他方で、親の教育水準と介入頻度には関連性がないとする研究もあり (Gross & Walsh, 1980; Warren, 2003)、親の教育水準が介入頻度にもたらす影響については、いまだ未解決である。

さらに、親の婚姻状態 (marital status) も考慮すべき要因とされている。つまり、父親と母親の両者が家にいる場合と、どちらか一方の場合での介入頻度の違いである。この要因について検討した 2 つの先行研究 (Gross & Walsh, 1980; Rossiter & Robertson, 1975) では、親 (特に母親) へのアクセスとテレビ視聴に関するルールの数やその実行との関連性が見出された。しかし、Warren (2003) の調査結果では、親の婚姻状態と介入頻度との間には関連性がみられず、従来の研究結果と一致しない結果が得られている。

3-2-2. テレビに対する態度

テレビ視聴が子どもに及ぼす効果について親がどのように考えているか、といった、親のテレビに対する態度は、介入頻度に影響を及ぼす重要な要因である。親のテレビに対する態度は、ネガティブな態度とポジティブな態度に二分されるが、この要因について検討した研究の多くは、親のテレビに対するネガティブな態度に焦点を当ててきた。

具体的に、親はどのようなネガティブな影響を懸念 (concern) しているのであろうか。この問題について検討を行った Cantor, Stutman, & Durran (1996) の研究によると、子どもの暴力の容認、暴力行為の模倣、傷つけられた人々に対する感受性の低下、性的早熟、タブーな言葉や汚い言葉の使用、恐怖感や悪夢などが、親が懸念するテレビの影響とされている。

このような親のテレビへの態度は、それぞれの介入戦略の頻度と有意な関連性があることが示されている。例えば、テレビのネガティブな影響を強く懸念する親たちは、子どもたちの視聴を管理するルールを多く用いている (e.g., Bybee et al., 1982; van der Voort et al., 1992)。また、Krcmar (1996) は、テレビが子どもたちの行動に及ぼす影響を懸念する親たちは、そうでない親たちよりも、V チップの使用によって子どもたちのテレビ視聴を制限する傾向があることを示した。

一方、親のポジティブな態度が介入頻度に及ぼす影響についても、僅かながら研究が行われている。一般的に、就学以前の子どもたち向けに制作された番組に対する親の態度は、非常にポジティブなものであり (Bernard-Bonnin, Gilbert, Rousseau, Masson, & Mauheux, 1991)、子どもの年齢に適した番組に限り、テレビは大部分の親たちに子どもの発達において有益であると考えられている。このように親のテレビに対する態度がポジティブな場合は、制限的介入やネガティブなコメントを伴った指示的介入は行われず、視聴行動や番組理解を促進させることを意図した介入が増加すると思われる。また、Dorr, Kovaric, & Doubleday (1989) は、テレビをポジティブに評価している親たちは、子どもと共視聴したり番組の内容について話し合ったりする傾向があることを示している。加えて、van der Voort ら (1992) は、「親のテレビへの態度が、ポジティブなものであれ、ネガティブなものであれ、テレビの効果を強く信じている親たちの間で、共視聴や話し合いを含めた介入が多く行われている」と主張する。すなわち、親の態度がポジティブな場合は、テレビの効果を強化するために介入頻度が増加し、ネガティ

ブな場合は、有害な内容から子どもを守るために、やはり介入頻度が増加するとされている。したがって、親の態度が中立的な場合が、最も介入頻度が少ないと考えられる。

3-3. 介入頻度に関する要因をめぐる議論

以上のように、先行研究では、子どもと親のデモグラフィック要因と、親のテレビに対する態度が、子どものテレビ視聴に対する介入の頻度に関する要因として取り上げられてきた。しかし、これらの要因が介入頻度に直接影響を及ぼしているかどうかについての疑問も指摘されている。

そのなかでも、Valkenburgら(1999)は、子どもの年齢、親のテレビに対する態度、親のジェンダーの3つの要因に対して、以下のような疑問を呈している。

まず、子どもの年齢について、彼女らの調査では、幼少の子どもを持つ親と年長の子どもを持つ親の介入頻度に有意差が見られたが、テレビが子どもたちに及ぼすネガティブな影響についての親の懸念を統計的にコントロールしたとき、子どもたちの年齢による差が消失したことから、子どもの年齢というよりもテレビの影響についての親の懸念、すなわち、親のテレビに対するネガティブな態度が、介入頻度を増加させる要因ではないかと論じている。

ただし彼女らは、親のテレビに対するネガティブな態度は、制限的介入と指示的介入の場合には、その頻度に影響を及ぼすことを認めているが、社会的共視聴の場合には、介入頻度と関連性がないと指摘している。彼女らは、調査結果から、親たちはテレビのネガティブな影響についての懸念とは関係なく、単に家族の娯楽として、あるいは親子とともに時間を過ごす方法として、社会的共視聴を行う場合があると論じ、社会的共視聴は、親のテレビに対する態度からは影響を受けない独特の介入形態である、と結論づけている。

また、親のジェンダーによる介入頻度の違いについて、彼女らは、制限的介入と指示的介入の場合、母親が父親よりも頻繁に行う傾向があるとの結果を得たが、従来の「母親が主に子どもの世話をする」といった性役割ステレオタイプに基づく解釈は、介入頻度のジェンダー差を十分に説明するものではなく、むしろ母親が家庭の外で働いているかどうかという親の雇用に関する要因が重要である、と論じたのである。

この点に関連した研究として、Brown, Childers, Bauman, & Koch (1990)は、家庭外で仕事を持つ母親は、そうでない母親たちよりも、子どもが視聴するテレビ番組の内容を制限しないことを明らかにしている。Warren (2003)もまた、母親が仕事を持つ場合、ルールを設定するという短時間で介入可能な制限的介入が最も頻繁に用いられ、時間と空間が束縛される共視聴の頻度が最も少ないことを指摘し、共視聴が最も頻繁に行われるという他の研究結果とは異なる知見を報告しているのである。

4. 「共視聴」概念の検討

以上のような結果の不一致は、Valkenburgら(1999)による介入の類型化の以前と以後で、異なる類型化が諸研究において多く用いられたことを考えれば、当然のことである。しかし、最初に指摘したように、この分野の問題として、研究の絶対数がいまだ十分でないということが挙げられる。したがって、現状で一貫しない研究結果があっても、どちらの結果がより蓋然性が高いのかを、研究数の多少から判断することが困難である。

そうした限界はあるものの、少なくとも当初問題とした「共視聴」の操作的定義を明確にすることは、

今後この問題を検討していく上で重要であると考えられる。検討すべき点は、主に以下の3点にまとめられる。

第1に、子どもと共視聴者との関係性を明確にしなければならない。この問題は、「共視聴」が「社会的共視聴」と呼ばれる場合に、「社会的」という言葉がどのような意味合いで使用されているか、という問題と強く関連している。前述したとおり、「共視聴」と「社会的共視聴」の概念は、必ずしも明確に区別されていない。「社会的共視聴」という言葉を初めて用いた Valkenburg ら(1999)においても、この言葉に厳密な意味をもたせているとは言い難い(表1)。しかしながら、「社会的共視聴」という言葉には、視聴者間の相互作用や社会的関係の存在という意味合いが含まれていると考えられる。一方の「共視聴」は、単に他者と視聴経験を共有することと理解される。したがって、両者の解釈には差異が生ずるのである。実際、単なる「共視聴」には、例えば、映画館などで匿名的な他者と視聴経験を共有するような「物理的共視聴」と表現することのできる状況も含まれる。この点は、介入頻度に関する研究のみでなく、効果研究においても、厳密な区別が求められるところである。現行の介入研究分野では、共視聴者が親である場合も、実験者である場合も、「共視聴」効果として一括し、比較検討を行っている。しかし、志岐(2004, 2007)は、共視聴している他者が誰かということが、テレビに対する反応の表出に影響を与えることを指摘しており、子どもにとってどれだけその他者が意識されているかといった、子どもと共視聴者との関係性は、その効果を規定する重要な要因なのである。したがって、「共視聴」という言葉が、単に他者とともに視聴することを意味するのであれば、その下位概念として「物理的共視聴」と「社会的共視聴」を設けるべきである。

第2に、子どものテレビ視聴に対し影響を及ぼそうという親側の意図があるのか否かを明確にしなければならない。つまり、積極的に介入しようという意図を持たない、単に娯楽を目的とした共視聴や、親子で偶然に一致した視聴行動を、介入の一形態として扱うか否かという問題である。前述した van der Voort ら(1992)の研究と Valkenburg ら(1999)の研究では、共視聴の背景に積極的な意図があるか否かという点で、解釈が異なっている。すなわち、前者は子どものテレビ視聴に関与しようという積極的な意図があるものとして、後者はそのような意図がないものとして解釈しているのである。したがって、もしこれらの研究が、それぞれの解釈に基づいた操作的定義を行った上でその頻度を測定していれば、たとえ結果が異なっても、その整合性は保たれたはずである。このような理由からも、共視聴の厳密な操作的定義が求められるのである。

第3の問題点は、共視聴の概念にコメントの提供を含めるのか否かということである。Bybee らの類型化を用いた研究では、共視聴とコメントの提示が同じ次元に配置されていることから、研究によっては、親によるコメントの提供を共視聴の概念の中に含めているものもある。しかしこの場合、共視聴と指示的介入の区別は極めて曖昧なものとなる。前述した Watkins ら(1980)の研究のように、コメント自体には効果がなく、大人が視聴に立ち会うことが子どもの学習効果を高めるというケースが存在する限り、共視聴とコメントの提供は区別して概念化するほうが妥当であると思われる。これに関連して、指示的介入についても、コメントのポジティブな側面とネガティブな側面、あるいは説明的な側面と評価的な側面のどこに焦点を当てるのか、そしてどの範囲まで扱うのかをより明確にしなければならない。なぜなら、Austin, Bolls, Fujioka, & Engelbertson (1999)も指摘しているように、それらは異なる動機づけにより特徴付けられるからである。動機づけの相違は、介入頻度に影響を及ぼすことは言うまでもない。このような介入行動の背景にある動機づけを簡略化する限り、研究結果間の不一致は免れ

表2 介入頻度に関する要因と主な研究例

| 研究 | 被験者 | 要因 | 結果 |
|-----------------------------|--|--|--|
| Bybee et al. (1982) | 18歳以下の子どもを持つ親200名。 | ①子どもの年齢 ②親の年齢 ③親のジェンダー ④親による反社会的なテレビ効果の知覚 ⑤親による向社会的なテレビ効果の知覚 | ①以外のすべてに、介入頻度への影響を確認。 |
| Abelman & Petty (1989) | 4年生の子どもと、その親364組。 | ①子どもの認知能力 ②子どもの視聴時間量 ③子どものジェンダー | すべての要因に介入頻度への影響を確認。ただし、③は個々の介入戦略の頻度ではなく、介入全般の頻度と有意な関連性を確認。 |
| Lin & Atkin (1989) | 11～17歳の子ども444名（11～13歳221名、15～17歳223名）。 | ①子どもの年齢 ②子どものジェンダー ③子どもの学業成績 ④親の人数（同居） ⑤きょうだいの人数（同居） ⑥親の収入 ⑦親の教育水準 ⑧親の雇用状態 ⑨その他メディア関連変数 | ⑥以外のすべてに、介入頻度への影響を確認。⑨については割愛。 |
| van der Voort et al. (1992) | 3～18歳の子どもを持つ親771名。 | ①子どもの年齢 ②子どものジェンダー ③親の年齢 ④親のジェンダー ⑤親の視聴時間量 ⑥親の教育水準 ⑦親のテレビへのネガティブな態度 ⑧親のテレビへのポジティブな態度 | ③以外のすべてに、介入頻度への影響を確認。 |
| Valkenburg et al. (1999) | 5～12歳の子どもを持つ親519名。 | ①子どもの年齢 ②子どものジェンダー ③子どものテレビ視聴時間量 ④親のジェンダー ⑤親の教育水準 ⑥親のテレビによる攻撃性に対する懸念 ⑦親のテレビによる恐怖に対する懸念 ⑧親のテレビの性的内容に対する懸念 | ②および⑧以外のすべてで、介入頻度への影響を確認。 |
| Warren (2003) | 1～5歳の子どもを持つ親129名。 | ①子どもの年齢 ②子どものジェンダー ③子どもの視聴時間量 ④親のジェンダー ⑤親の教育水準 ⑥親の婚姻状態 ⑦親の視聴時間量 ⑧親のテレビに対する態度（ネガティブのみ） ⑨その他 | ①②⑧で、介入頻度への影響を確認。⑨については割愛。 |

ない。

以上の点を精緻化しながら、介入戦略についての一般的かつ包括的な概念を構築することが求められる。また、研究結果を比較可能にするためにも、ある程度測定尺度を統合することが必要である。とりわけ、各研究によって最も大きく見解が分かれる「共視聴」についてより議論を深めていくことが、本稿で示した介入研究に残された諸問題の解決に大きく貢献すると思われる。

注

1. Bybeeら(1982)は、調査実施時“guidance”という言葉を用いているが、調査内容から“mediation”と同義のものとして解釈することができる。

2. Desmond ら (1985) は、介入を、「テレビメディアや、物理的、社会的環境の複雑さを、あらゆる認知的発達段階にある子どもたちが理解できる言葉に翻訳するという、親や他者による積極的な試みのいくつかの形態」と定義し、その説明的機能を強調した。彼らは、子どもは介入された視聴経験により、人、場所、職業、政治に関する情報や、態度、規範、マイノリティーに対する判断等を習得することができるとしている。したがって、彼らの介入概念の定義に見られる「テレビメディアや、物理的、社会的環境の複雑さ」とは、これらの事柄を指しているものと思われる。一方、Austin (1993) は、「介入」という言葉の意味について、それは肯定的なものであれ、否定的なものであれ、番組内容についての話し合い (discussion) のみを指しており、共視聴やルール作りのような概念とは区別されるものであるとした。

参考文献

- Abelman, R. 1985 Sex differences in parental disciplinary practices: An antecedent of television's impact on children. *Women's Studies in Communication*, 8, 51-61.
- Abelman, R. & Petty, G. R. 1989 Child attributes as determinants of parental television-viewing mediation: The role of child giftedness. *Journal of Family Issues*, 10(2), 251-266.
- Atkin, C. K., Greenberg, B.S., & Baldwin, T. F. 1991 The home ecology of children's television viewing: Parental mediation and the new video environment. *Journal of Communication*, 41(3), 40-52.
- Austin, E. W. 1992 Parent-child TV interaction: The importance of perspective. *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 36, 359-361.
- Austin, E. W. 1993 Exploring the effects of active parental mediation of television content. *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 37, 147-158.
- Austin, E. W., Bolls, P., Fujioka, Y., & Engelbertson, J. 1999 How and why parents take on the tube. *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 43, 175-192.
- Austin, E., Knaus, C., & Meneguelli, A. 1997 Who talks how to their kids about TV: A clarification of demographic correlates of parental mediation patterns. *Communication Research Reports*, 14, 418-430.
- Bernard-Bonnin, A., Gilbert, S., Rousseau, E., Masson, P., & Maheux, B. 1991 Television and the 3- to 10-year-old child. *Pediatrics*, 88(1), 48-54.
- Brown, J. D., Childers, K. W., Bauman, K. E., & Koch, G. G. 1990 The influence of new media and family structure on young adolescents' television and radio use. *Communication Research*, 17, 65-82.
- Buerkel-Rothfuss, N. L. & Buerkel, R. A. 2001 Family mediation. In J. Bryant & J. A. Bryant (Eds.) *Television and the American Family* (2nd ed.), (pp. 355-376). Lawrence Erlbaum Associates.
- Bybee, C., Robinson, D., & Turow, J. 1982 Determinants of parental guidance of children's television viewing for a special subgroup: Mass media scholars. *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 26, 697-710.
- Cantor, J., Stutman, S., & Duran, V. 1996 What parents want in a television rating system: Results from a national survey. National PTA, the Institute for Mental Health Initiatives, and the University of Wisconsin-Madison. <http://www.pta.org>
- Colder-Bolz, C. R. 1980 Mediation: The role of significant others. *Journal of Communication*, 30(3), 106-118.
- Desmond, R. J., Hirsch, B., Singer, D. G., & Singer, J. L. 1987 Gender differences, mediation, and disciplinary styles in children's responses to television. *Sex Roles: A Journal of Research*, 16, 375-389.
- Desmond, R. J., Singer, J. L., Singer, D. G., Calam, R., & Colimore, K. 1985 Family mediation patterns and television viewing: Young Children's use and grasp of the medium. *Human Communication Research*, 11, 461-480.
- Dorr, A., Kovacic, P., & Doubleday, C. 1989 Parent-child coviewing of television. *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 33, 33-51.
- Fry, D. L. & McCain, T. A. 1980 Controlling children's television viewing: Predictors of family television rules and their relationship to family communication patterns (abstract). Paper presented at the Annual Meeting of the Association for Education in Journalism (63rd, Boston, MA, August 9-13, 1980). (ERIC Document Reproduction Service NO. ED 193696). <http://searcheric.org/>
- Gross, L. S. & Walsh, R. P. 1980 Factors affecting parental control over children's television viewing: A plot study. *Journal of Broadcasting*, 24, 411-419.

- Hicks, D. J. 1968 Effects of co-observer's sanction and adult presence on imitative aggression. *Child Development*, 39, 303-309.
- 放送倫理・番組向上機構 2004 青少年へのテレビメディアの影響調査: 調査報告書 第3回 (2002年度).
- Krcmar, M. 1996 Family communication patterns, discourse behavior, and child television viewing. *Human Communication Research*, 23, 251-277.
- Lin, C. A. & Atkin, D. J. 1989 Parental mediation and rulemaking for adolescent use of television and VCRs. *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 33, 53-67.
- Lyle, J. & Hoffman, H. R. 1972 Children's use of television and other media. In E. A. Rubinstein, G. A. Comstock, & J. P. Murray (Eds.) *Television and social behavior: Television in day-to-day life*, (vol. 4), (pp. 129-256). Rockville, MD: National Institute of Mental Health.
- McLeod, J. & Brown, J. D. 1976 The family environment and adolescent television use. In R. Brown (Ed.) *Children and television* (pp. 199-234). Beverly Hills, CA: Sage.
- Mohr, P. J. 1979 Parental guidance of children's viewing of evening television programs. *Journal of Broadcasting*, 23, 213-228.
- Nathanson, A. I. 1999 Identifying and explaining the relationship between parental mediation and children's aggression. *Communication Research*, 26(2), 124-143.
- Nathanson, A. I. 2004 Factual and evaluative approaches to modifying children's Responses to violent television. *Journal of Communication*, 54(2), 321-336.
- Rossiter, J. R. & Robertson, T. S. 1975 Children's television viewing: An examination of parent-child consensus. *Sociometry*, 38, 308-326.
- 志岐裕子 2004 攻撃的な笑いと性的な笑いに関する研究。(慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻修士論文).
- 志岐裕子 2006 (印刷中) 他者への同調とタレントへの役割期待が笑い反応に及ぼす効果. *社会心理学研究*, 22(2).
- Singer, J. L., Singer, D. G., & Rapaczynski, W. S. 1984 Family patterns and television viewing as predictors of children's beliefs and aggression. *Journal of Communication*, 34(2), 73-89.
- St. Peters, H., Fitch, M., Huston, A. C., Wright, J. C., & Eakins, D. J. 1991 Television and families: What do young children watch with their parents? *Child Development*, 62, 1409-1423.
- Valkenburg, P. M., Krcmar, M., Peeters, A. L., & Marselle, N. M. 1999 Developing a scale to assess three types television mediation. *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 43, 52-66.
- van der Voort, T. H. A., Nikken, P., & van Lil, J. E. 1992 Determinants of parental guidance of children's television viewing. *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 36, 61-74.
- Warren, R. 2003 Parental mediation of preschool children's television viewing. *Journal of Broadcasting & Electronic media*, 47(3), 394-417.
- Watkins, B., Calvert, S., Huston-Stein, A., & Wright, J. C. 1980 Children's recall of television material: Effects of presentation mode and adult labeling. *Developmental Psychology*, 16, 672-674.